

Japanese text

2018年 秋/冬号 日本語編

アーティスト
インタビュー

深堀隆介

——水面の向こうに己を見る

撮影＝八田政玄 文＝編集部

p.064

透明な超難黄変エポキシ樹脂を何層も重ね、その中に少しずつアクリル絵の具で金魚の身体を立体的に描いてゆく。出来上がった作品は、まるで本物の金魚のごとく、水面下にゆらりと美しく自然な影を落とす。金魚絵師・深堀隆介さんの代表的な樹脂の作品である（写真左下）。

今でこそ金魚というと深堀さんの名が出てくるまでに国内外で有名になったが、美大を出た当初はまったく金魚には興味がなかったというから驚きだ。

「小さい頃は金魚ってちょっとかっこ悪いもの、アートになんてならないものと思っていました。弥富市という金魚の養殖が盛んな町の近くで生まれ、身近に金魚がありすぎた。その頃日本人は海外のモノを尊ぶ傾向にあり、私も熱帯魚の方がかっこ良く見えてましたね。ただ水の中の生き物にはずっと興味がありました。人間は水中では生きられない。でもその水中が彼らにとっては生きる場所で、逆に水がないと死んでしまう。水面を境としたあちら側とこちら側。考えるほどに惹かれるテーマでした」

そんな深堀さんがある時、天啓に打たれるように金魚の美に気がついた。「もう美術なんてやめてしまおうと、悩み疲れて自室で寝転がった時でした。ベッドの横にあった汚れた水槽の中に、ソクソクするほど美しい、赤く光る背中があったのです。その美しさを表現したくて、描いて描いて描きまくりました」。その衝動は借り物ではなく、自分の中から出てきたオリジナルのもの。「海外の人はもちろん、日本人にも金魚の美しさに気づいてほしくて、以来ずっと金魚の作品を作っています」。聞けば確かに金魚というのは稀有な魚である。突然変異で発生して以降、1500年以上前からずっと人類に飼われ、その特異な体色を維持している。ヒトが彼らの飼育をやめれば、三代で祖先の鮪ふなに戻ると言われている。

「そう聞くと儚そうですが、実際は愛情さえかけてあげればとても長生きします。強い魚ですよ。そして行動がいちいち人間を連想させる。狭い水槽で過剰に飼うと喧嘩が起こる。人間で言う戦争ですね。生きていてだけで糞尿で水を汚すところも、人間という存在を彷彿とさせます。地球は汚れていく水槽です。下水処理と言っても、実は人の力ではまだ完全には綺麗にならないんですよ」。

この夏からは初めて公立美術館での個展巡回展を行っている。展示では、江戸時代に有名だった金魚屋「真鍮屋しんちゆう」を現代に再現。1年以上かかって制作するアクリルの大作の数々の他、平面や立体のさまざまな作品を展示している。「色々な表現方法がありますが、やはり基本は金魚。自分のアイデンティティが金魚なんです」と真っ直ぐに語る深堀さん。

「今年で金魚を描き始めて18年になりますが、まだまだやりたいことがありますし、もっと世界中の人に自分の作品を見てほしい。死ぬまで金魚を描き続けたいですね」

深堀隆一（ふかほり・りゅういち）

美術作家。1973年、愛知県生まれ。1995年、愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸専攻学科卒業。2000年、金魚の魅力に目覚める（金魚救い）。2005年より国内外にて個展多数開催。2013年、MY MODERN MET 10cutting-Edge Artist of the 21st Century 受賞ほか。横浜美術大学客員教授。
goldfishing.info

『金魚絵師 深堀隆介展 平成しんちゆう屋』

9月15日～11月4日
刈谷市美術館
愛知県刈谷市住吉町4-5
www.city.kariya.lg.jp/museum

『2.5D Painting』

12月13日～12月19日
Joshua Liner gallery
540 West 28th Street, New York, NY
joshualinergallery.com

(写真)

《金魚酒命名^{あやがさ}彩傘》2017年

平塚市美術館での展示風景。

深堀さんが「これからの制作の軸にしたい」と語る、板に樹脂を塗り重ねた《蒼鬼^{そうき}》2018年